

5 . スコットランドの観光産業における伝統スポーツ・民俗舞踊

岡本 純也

ハイランドに響き渡る バグパイプの音色
海鳥たちと渡る 最果ての島々
川の流れにたたずむ ツィード姿の釣り人たち
荒涼とした大自然の中ではぐくまれた
独自の文化が今も生きる国 スコットランドへ
(『地球の歩き方 スコットランド 2001～2002 版』

表紙より)

．はじめに

観光用のガイドブックである 2001～2002 年版『地球の歩き方 スコットランド 1』の表紙には、バグパイプ奏者とハイランド・ダンスの踊り手の絵が描かれている(図1)。また、それ以前の版の 1998～1999 年版、1999～2000 年版の表紙には、それぞれスコットランドのハイランド地域の風景、スコットランドの旗 - セント・アンドリュース旗 - を翻した城を背景にバグパイプを奏でる人々が描かれている。スコットランドの民族衣装「キルト」、「バグパイプ」、氷河が削った峡谷「グレン」、独特の表情を持った長毛の牛「ハイランド・カウ」などの、スコットランドを想起させる要素が巧みに散りばめられたそれらの情景は、端的にわれわれ日本人が抱く典型的なスコットランドのイメージを表象しているといえるのであろう。さらには、表紙の絵に付された散文的な誘いの言葉(冒頭の引用文参照)にも、スコットランドのイメージを喚起する言葉がいくつも織りまぜられ、これから向かうことになるであろう旅先での経験に読者 = 旅行者の思いを馳せさせずにはいない。まさに、ガイドブックの表紙をめくる時、スコットランドへの旅が始まるのである。



図1 . スコットランドを表象する
観光ガイドブックの表紙

本稿では、上記のような、ガイドブックなどによって創り上げられる観光地のイメージと実際の観光地での実践がどのように異なっており、またお互いにどのように影響しあっているのかについて、スコットランドのハイランド・ゲームズとハイランド・ダンスを取り上げ検討していきたい。

．「観光のまなざし」

スコットランド観光のガイドブックの例にみるような、いささか陳腐化された観光地のイメージこそ、ジョン・アーリのいう「観光のまなざし Tourist Gaze²」の産物であり、メディアや観光パンフレット、観光ガイドブックによって再生産され、観光という行為の原動力となるものである。フーコーの「医学的まなざし」を参照にして提起された「観光のまなざし」は、アーリによれ

ば「社会的に構造化され組織化されている³」。
すなわち、家から離れ非日常の状態にある観光客は、普段の生活の中では目にすることのできない、その土地独自の、そこでしか体験できないような対象に対して「まなざし」を向け、観光業者はこぞって観光客の求める、その土地でしか体験できない「物語」をパンフレットやガイドブックを通して売り込むのである。このように書くと、観光地に好奇を求める観光客の「まなざし」が先にあるようにとらえられるかも知れないが、実のところ、彼らが求める「日常にはない」風景とは、往々にして観光パンフレットやガイドブックによって創り上げられたイメージの中にあるそれであり、この点で、「観光のまなざし」はあらかじめ社会的に構造化されているのである。

たとえば、「ツーリストが、パリでキスをしている人を観た場合、そのまなざしにとらえられたものは『永遠のロマンチックなパリ』となる。イギリスの小さな村を観る場合、ツーリストがまなざしをむけているのは『本物の古き英吉利』である⁴」。

アーリの考えに従えば、上記の観光ガイドの表紙の絵もスコットランドの「見方」を一定の枠組みに規定するものであり、そのイメージを期待した観光客の多くが海を渡り、実際の目での確認作業を行うことになるであろうことが予測される。

ところで、このような「出発以前における観光地のイメージの受け入れ(メディアやガイドブックによる刷り込み) 現地での確認(実際に触れたり、写真を撮ったりする)」という一連の消費行動である観光を、ダニエル・ブーアスティンは「疑似イベント」の典型であるとみなしている⁵。観光客は、観光地に対して、前もって受け入れてしまっている、メディアによってつくられたイメージを求め、現地の生活の中にある「リアルさ」を拒絶し、そして観光業者によってつくられた隔離された空間の中でだけ「その土地らしさ」を体験することになる。

「地方的雰囲気を意識的に作り出そうという努力は、完全にアメリカ的なものであり、また観光客をその土地から隔離する効果的な方法である、(マ)イスタンブール・ヒルトンの周囲には、本当のトルコが横たわっている。しかしホテルの内部には、トルコの様式の模倣があるだけである。その結果、トルコのまんなかにありながら、トルコの経験を間接的にしか味わえないというふしぎな現象が生じる⁶。」

上の引用文にみられるように、ブーアスティンの考えでは、観光客用の「疑似イベント」の外には「本物」の「リアル」な現地社会や文化があると想定されるが、アーリは、そのような「観光=まがいもの」、「人々の生活=本物」という見解に疑義を申し立てる。

ブーアスティン同様、「本物の歴史」を想定し、それに対して観光客向けに保存された英国の多くの<遺産 heritage>が表象する「歴史」を「偽物」と断じるヒュイソンに、彼は「この保存運動の底流にある巨大な大衆的基盤を無視している」と痛烈な批判の言葉を投げかけ、その証拠として150万人のメンバーを持つナショナル・トラストは英国で最大の大衆組織であることをアーリは指摘する⁷。そして近年になって復元や改修などがなされている<遺産>の数々が、問題となる歴史的建造物や景観の周囲に住む地域住民の運動や地方自治体による支援によって「現在に蘇っている」ことを多くの事例を示しながら説明する。当然のことながら、そのような<遺産>保護運動の場では、ノスタルジックな「まなざし」をもった住民の活動と地域経済を活性化させようとする自治体や地域経済界の戦略とが結びつき、その結果として観光客が喜んで足を運ぶ「観光アトラクション」としての<遺産>が創り上げられるという構造についてもアーリは十分な分析を加えている⁸。観光の場では「保護主義者と開発業者の共同作業」が行われ、実際に住民が生活をする村や町が「博物館化 museumify」されていくのである。そこには、「本物」と「偽物」の境界は

なく、「内側＝住民」と「外側＝観光客」の境界もなく、内と外の「まなざし」の交錯により、一定の「イメージ＝物語＝テーマ」を帯びた景観の村や町があちらこちらに創り上げられるのである⁹。

・スコットランドという「物語」を表象する身体文化

アーリの論の興味深い点は、観光地に創り上げられる「観光文化」をプーアスティンが「偽物」や「虚構」として断じてしまい深い洞察をストップさせてしまったのに対して、それらが一定の「イメージ＝物語」を帯びて「歪められて」創られているという事実を認めつつ、丹念に観光業者、地方自治体、観光客などの実態を分析し、観光地特有の文化が創り出される過程を考察するところにある。彼は主に、「観光のまなざし」が求める「英国の歴史」を表象した建造物について論究を行っているが、そのような分析視点は、観光地でみられる身体文化に対しても応用可能であろう。

たとえば、次の写真を見てもらいたい。



図2 . ハイランド・ダンス

(セント・アンドリュース・ハイランド・ゲームズにて)

これは、昨年(2015年)の8月にスコットランドのセント・アンドリュース・ハイランド・ゲームズの会場にて著者が撮影した写真であるが、冒頭に紹介したガイドブックの表紙にみられる風景を「観光のまなざし」が求める「スコットランドらしい」景色とするならば、「バグパイプ」を演奏する人、

「民族衣装」を着て踊る踊り手を写り混ませたこの写真にみられる風景もスコットランドをまさに表象する「絵」であるといえる。

5月～9月の間にスコットランド各地で催されるハイランド・ゲームズ¹⁰の会場では、この写真のようなスコットランドを表象する「景色＝絵」が認められ、ハイランド・ダンスは、その中心的アトラクションとなっている。ハイランド・ダンスだけでなく、ハイランド・ゲームズでは、民族衣装「キルト」を身につけた男性の競技者によるヘビー競技(丸太投げ、砲丸投げ、ハンマー投げなど)やレスリングなどが見られ、これらもまた、スコットランドの伝統的文化を目的に当地を訪れる「観光のまなざし」を楽しませるものとなる¹¹(図3)。



図3 . 丸太投げ競技

(ディングウォール・ハイランド・ゲームズにて)

さて、それではこれらのスコットランドの「伝統的」身体文化は、「観光のまなざし」にどのような影響を与え、また、そこからどのような影響を受けていると考えられるだろうか。

まず、ハイランド・ダンスの踊り手やヘビー競技に出場するプレイヤーの着用する「タータン tartan」柄の「キルト kilt」が問題となる。

タータン柄は今ではマフラーやスカーフの模様として世界中に広まっているが、一般的に、かつてスコットランドの各地を治め互いに闘い合っていた地縁・血縁組織である「氏族 clan」のそれぞれを象徴する模様で、氏族ごとに異なっているという説明がなされる。それらの模様が入った布から作られたスカート状の民族衣装がキルトであ

る。これらは結婚式などの正装として身につけられるばかりでなく、スコットランドのチームを応援するサッカー・ファンの中にも好んでこの衣装を着ける者がいるほど、スコットランドを表象するアイテムとして広く受け入れられている。したがって、これらの民族衣装を着た者が多く目にされるハイランド・ゲームズの会場は、まさに、伝統的なスコットランドの一大ページェントとなりうるのである。

このように、スコットランドの「古い歴史」と結びついた伝統的な民族衣装であるとみなされるタータンやキルトであるが、歴史学者、ヒュー・トレバー＝ローパーは、それらは近代になって「創られた伝統」であると批判する¹²。

「今日、スコットランド人が彼らの民族性を祝ぐために集うときにはかならず、民族性をはっきりと示す文物によってアイデンティティーの確認をまごうことなく行う。その色と柄がそれぞれの『氏族』を示すタータン模様で織られたキルトを身につけることがそのひとつであり、また音楽はといえば彼ら独自の楽器はバグパイプである。ところが、人びとがきわめて旧くからのものとみなすこうした文物は、実際にはほとんどが近代の産物なのである。」

彼は、イングランド商人によってなされた「氏族ごとに柄を違えて売り込む」という販売戦略によって、タータンとキルトが18世紀末から19世紀前半にかけて普及していった過程について分析し、スコットランドのハイランド地方の文化にまつわる「神話」が、それらの衣装を売り込む商人とハイランド地方の文化に懐古的なまなざしを向ける知識人によって「捏造された伝統」であるというのである。

観光用のガイドブックの表紙を飾るものとして選ばれ、その中では「スコットランドの伝統的な民族衣装」という説明を付されるタータンおよびキルトは、未だにトレバー＝ローパーの明らかにしたハイランドにまつわる「神話」が健在である

ことの証拠であることを語っており、スコットランドにそれを求めるであろう「観光のまなざし」は、その延長上に創り上げられたものであるといえるであろう。それだけでなく、観光客に「伝統的な」スコットランドのイベントとしてみなされるハイランド・ゲームズ¹³は、実際に目にする者に「スコットランドの伝統文化は未だに健在である」ことを示すことによって「神話」を強化しているとも考えられるのである。

・誰がために彼らは踊る

では、ハイランド・ゲームズに参加するヘビー競技のプレイヤーやハイランド・ダンスの踊り手は、観光客を喜ばせるためにタータンを身に着けていると言えるだろうか。すなわち、アーリが指摘するような、メディアによって創られたイメージを具現化する〈遺産〉のように、イメージの中のスコットランドの姿を具現化するためにこのイベントが成立しているかということがここでは問題となる。

確かに、「観光のまなざし」でとらえれば、ハイランド・ゲームズに参加する競技者やダンサーは「スコットランドの伝統文化を大切にすスコットランド人」の典型としてとらえられるであろう。しかし、実のところ、彼らが伝統的とされる衣装を着けるには、観光客の勝手な想像とは別のところに理由があると考えられる。それは時に「観光のまなざし」を拒絶さえする、彼らの競技へ熱中する姿にみてとれる。

ここでは、完全に競技化されたハイランド・ダンスに熱中する踊り手についてみていきたい。

スコットランドのスポーツ史研究者であるグラント・ジャービーは、ハイランド・ゲームズの原型は12世紀から18世紀半ばまでにできあがり、現在のような形で行われるようになったのは古くとも18世紀末であろうとしている¹⁴。発生当初は、氏族の長（clan chieftain）の前で優秀な戦士を選抜することや軍事訓練といった色彩

の濃かったハイランド・ゲームズの中で踊られたハイランド・ダンスは、男性のみによって踊られていた。また、ハイランド・ゲームズは、地域ごと、氏族ごとに分かれて催されていたため競技に統一性はなく、ハイランド・ダンスも競技形式で行われていたものの、それぞれの地方独自の踊り方で踊られていたのである¹⁵。

そのような状態が終わるのが 1950 年であった。各地のハイランド・ダンスの指導者や関係者が集まって統一した型を創り、同時に、スコットランド公式ハイランド・ダンス協会 (Scottish Official Board of Highland Dancing: 以下ハイランド・ダンス協会) を設立して踊り方をコントロールするようにしたのである¹⁶。

そのコントロールの仕方は非常に興味深いものであった。新しいシステムは、統一の踊りの型 (technique) を創り、協会が設けたルールの下で競技会を開き、その成績により踊り手が協会公認の技能階梯を初級から上級まで昇っていくことができる¹⁷というものであった。そして、上級者は協会が主催する試験を受け、合格すると指導者や審判の資格を受けることができるのである。また、協会が定めた踊り方やルールに問題があるとされた場合には、協会の役員が協議して明確な回答を表明することになっている。

このハイランド・ダンスの競技システムは、何について競い合うかの基準の明確化、どのように競うかのルールの明確化、民主的手続きによる問題の解決、中央集権的な踊り方・ルールのコントロールといった特徴をもち、いわばその成立は「民俗舞踊のスポーツ化」¹⁸が成立したととらえられよう。このシステムの成立により、それまで各々バラバラに催されていたハイランド・ゲームズにおけるハイランド・ダンスの競技会どうしが結びつけられ、また、地域ごとに独自に存在したハイランド・ダンスも協会の統一した型に一本化されるようになった。

図 4 をみていただきたい。これは、ハイランド・ダンスの演目の一つである Sward Dance を踊る少女たちであるが、飛び上がっているにもかか

わらず 2 人の動きが正確に同期していることがみてとれる。このような、手の指先からつま先まで統一性のとれた動きは、上記の競技システムにより踊り手の動きがコントロールされている結果であるといえよう。



図 4 . ハイランド・ダンスを踊る少女

(デニングウォール・ハイランド・ゲームズにて)

さて、それでは彼女たちの着ている民族衣装について話しをもどそう。ハイランド・ダンス協会が設定したルールには Dress Code の項目があり、踊りを踊る際の衣装の付け方もルールによって厳密に規定されているのである¹⁹。そのコードにしたがわない場合、もしくは、踊っている最中に靴が脱げたり、衣装が乱れたりした場合には、審査の点数が減点されてしまうことになるのである。

以上のように、その土地独自の伝統文化を求める観光客にとっては、やや幻滅を覚えることになろうが、ハイランド・ダンスを踊る彼ら / 彼女らは、伝統文化を保持することを第一に考えてダンスを踊ったり、民族衣装を着けたりしているのではなく、何よりも、競技で点数を多く獲得するためにそのようにしているのである。それも、何百年も昔から伝えられた踊りを継承しているのではなく、50 年ほど前に意図的に創られたダンスを、近代的な競技システムの中で踊っているのである。

・ 観光の振興かプレイの振興か

「伝統的」とみなされる身体文化をその目玉とした観光の振興の現場では相異なる論理が交錯する。一方では、その身体文化を当該地域の古くからある「正統（真性）なる」文化とみなし、いわば生きた歴史的絵巻物として扱おうという論理。これは、アーリが報告する英国の歴史的建造物を利用した観光開発にも共通したものであり、その論理の下では、地域のアイデンティティーの核となる「正統なる」文化を維持・保存しようという地元住民とそれを観光アトラクションとして利用して地域経済を活性化しようとする地方自治体や観光業者の幸せなる共同作業が展開されることになる。他方、これは歴史的建造物観光にはないものであるが、身体文化特有の、プレイに熱中する者の論理がそこには存在すると考えられる。これは、外側から観る者にとっては理解しにくいものであるが、それをプレイした者たちには確実に共有された身体感覚に根ざした論理である。それは「観光の振興」や「伝統文化の維持」という論理からはみ出していこうとするような、プレイヤーの論理とでもいえようか。

民俗芸能研究者の橋本裕之は、国指定重要無形民俗文化財に指定された「壬生の花田植」の事例について、それを演じる当事者たちが、伝統的なやり方に則って実際の水田で牛を使いながら演じる、正式な文化財披露の場よりも、牛などを利用しないで演じることのできる各種イベントの場の方にこの芸能の存在理由を発見していると報告している²⁰。橋本によれば、当事者たちは、正式な場においては「昔のまま」踊り、各地のイベントへ呼ばれていく時にはより自由に新たなる試みを取り入れて踊るという。踊り手たちは、2つの踊り方を使い分けるといって「戦略」をもっているのである。そしてその「戦略」の中心に存在するのは、当事者たちが「のぼせる」や「弾む」と表現する感覚であると、橋本は指摘する。この感覚は、外側からの「無形民俗文化財保護」や「観光の振興」という論理の枠組みをはみ出していかせ

る、当事者たちのパフォーマンスへの熱狂の感覚である。

先述のとおり、ハイランド・ゲームズの会場では、観光客が喜ぶような「伝統的な」スコットランドを表象する「記号」が多く観られ、そこには「伝統的な民族の祭典」といった物語も存在するように思われる。しかしながら、外側からそのようにまなざされるとしても、そこには、当事者たちのパフォーマンスへの熱狂が存在し、実はその感覚こそがこのイベントを支える中核に存在していると考えられる。

たとえば、次の写真を見て欲しい（図5）。



図5．自分の出番を待つダンサー

（セント・アンドリュース・ハイランド・ゲームズにて）

これはハイランド・ダンス・コンペティションの場において、自分の出番を待ちながら練習をしている少女たちの姿であるが、上半身は民族衣装を脱いで薄着になり、足に着けた長いソックスは下まで降ろしてしまっている。よく見ると、舞台の上にも、同様な格好をして練習をしている少女たちの姿が見て取れる。たしかに、スコットランドの夏にしては暑い日ではあったが、多くの観客の目の前で、恥じらった様子もなく一生懸命練習に興じる少女たちの姿には、伝統文化の担い手というよりは、陸上トラックの中でリラックスをしながら自分の出るレースを待つスプリンターや、メイン会場脇のスペースで最後の演技練習に励む新体操の選手などの、アスリートたちの姿が重ねられた。それは、観る者の「まなざし」などまったく意識しない、自らが参加している競技に集中し、没入している姿である。

アーリが指摘するように、観光化の振興に伴

い、地方自治体、地域住民、観光業者、観光客からのフォーマル/インフォーマルな圧力によって、「伝統的」とみなされる文化はますます「伝統」や「歴史」を表象するようになる。しかし、先述したハイランド・ダンス・コンペティションに夢中になる少女たちの姿をみる限り、「伝統」とみなされる身体文化の場合、建造物や景観と異なり、外側の圧力に時に反発するような独自の内部論理がそこには存在するように思われる。したがって、観光産業と身体文化の関係について考えていく際には、当事者たちの言葉に耳を傾け、外部からの「まなざし」と内部にある論理を緻密に分析していく必要があると考える。

1 「地球の歩き方」編集室、『地球の歩き方 スコットランド 2002～2001 版』（改訂第4版）、ダイヤモンド社、2001年

2 ジョン・アーリ、加太宏邦訳、『観光のまなざし - 現代社会におけるレジャーと旅行』、法政大学出版社、1995年

3 同上書、2ページ

4 同上

5 ダニエル・ブーアスティン、星野郁美・後藤和彦訳、『幻影の時代』、東京創元社、1964年

6 同上書、110～111ページ

7 アーリ、前掲書、194～198ページ

8 同上書、第6章参照

9 同上書、第7章参照

10 ハイランド・ゲームズ Highland Games はハイランド・ギャザリング Highland Gathering と呼ばれ、その起源は明確ではないが、スコットランドの氏族 Clan(血族を中心にした生活の共同体であり軍事組織でもあった)が1年に一度あつまり、族長(Chieftain)の目の前で優秀な戦士を選抜するために行ったという説がある。また、中世に起源をもつとする説もあるが、ハイランド・ゲームズ研究の第一人者である Grant Jarvie は12世紀から18世紀の半ばまでに現在のハイランド・ゲームの原型ができたをとらえる。

Grant Jarvie, *Highland Games -The Making of the Myth-*, Edinburgh University Press, 1991

11 ハイランド・ゲームズで行われる種目は地域によって異なるが、主にトラック種目、フィールド種目、ヘビー競技、ハイランド・ダンス・コンペティション、バグパイプ・コンペティション、スコティッシュ・レスリング、綱引きなどが行われる。

12 ヒュー・トレバー＝ローパー「伝統の捏造 - スコットランド高地の伝統」, エリック・ホブズボウム/テレンス・レンジャー編, 前川啓治ら訳, 『創られた伝統』, 紀伊國屋書店, 1992年

13 ハイランド・ゲームズに対する「観光のまなざし」の分析はより詳細に行わなければならないが、たとえば、日本のガイドブックには「ハイランド・ゲームズでは、装いもそれぞれのハイランダーたちが見られる」という説明があるように、伝統的なハイランドの文化に出会える場所としてこのイベントが位置づけられているといえるであろう。

「地球の歩き方」編集室、前掲書、28ページ

14 Grant Jarvie, op.cit

15 Scottish Official Board of Highland Dancing, *Highland Dancing -the Textbook of the Scottish Official Board of Highland Dancing [Sixth Edition]*, Lindsay Publications, 1993

16 ibid

17 技能階梯は年齢と競技会での成績によって決定され、Primary Beginners Novice Intermediate Premier と上っていく。Scottish Official Board of Highland Dancing, *Constitution and Rules 2001, 2001*

18 筆者はかつて、戦後における沖縄の民俗舞踊「エイサー」の競技化(競演化)を事例に、地域のそれぞれに評価基準のある民俗舞踊は統一のルールのもとに競い合うという競技化になじまない身体文化であることを論じた。しかし、スコットランドにおけるハイランド・ダンスの場合、1950年の協会の設立によって競技化、すなわち「スポーツ化」が成功したと考えられる。なぜ沖縄で民俗舞踊の競技化が破綻し、スコットランドで成功したのか今後比較していきたいと考えている。岡本純也、「民俗舞踊と地域アイデンティティ」, 『研究年報』, 一橋大学スポーツ科学研究室, 1998年

19 Scottish Official Board of Highland Dancing, 2001, op.cit.

20 橋本裕之、「保存と観光のはざままで - 民俗芸能の現在 - 」, 山下晋司編, 『観光人類学』, 新曜社, 1996年, 178～188ページ